



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	琉球国王家・尚家文書の総合的研究(表紙, 目次, はじめに)
Author(s)	豊見山, 和行; 赤嶺, 守; 高良, 倉吉; 山里, 純一; 上原, 兼善; 真栄平, 房昭; 田名, 真之; 安里, 進; 池宮, 正治; 西里, 喜行
Citation	
Issue Date	2008-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43245">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43245</a>
Rights	

# 琉球国王家・尚家文書の総合的研究

課題番号 16320091

2004(平成16)年度～2007(平成19)年度

科学研究費補助金(基盤研究(B))

研究成果報告書

2008年3月

研究代表者 豊見山 和行

(琉球大学教育学部教授)

## 目次

はじめに—研究の背景と目的—	1
研究組織・研究経費・研究成果	3
豊見山和行「本報告書の構成と「尚家文書」研究の現状」	6
第Ⅰ部「論考篇」	
真栄平房昭「尚家文書を調査した先駆者の足跡について」	11
高良倉吉「百浦添御殿普請日記に関する研究ノート」	18
山里純一「琉球王府の雨乞儀礼」	22
深澤秋人「上国使者の寺社参詣—1870年前後における変化と連続性—」	43
前田舟子「尚泰冊封時の望舟宴にみる官生派遣の代奏請願について」	53
第Ⅱ部「史料解説・紹介篇」	
豊見山和行「宮古島八重山島江富川親方御検使之時日記」第483号について	71
上原兼善「従御国元渡唐船作広昆布差荷之件」第263号について	82
上原兼善「渡唐人江申渡条目」第295号について	102
上原兼善「御国元御使者孫左衛門殿御内用日記」第383号について	126
上原兼善「出物米を以砂糖御買入被仰付候付日記」第389号について	146
山里純一「雨乞日記」第475号について	158
山里純一「雨乞日記」第476号について	165
山里純一「雨乞日記」第477号について	171
山里純一「雨乞日記」第478号について	183
山里純一「雨乞日記」第479号について	188
山里純一「雨乞御代参日記」第480号について	194
深澤秋人「明治二同治八年己巳六月ヨリ翌九月迄在勤中日記」第342号について	202
麻生伸一「江戸立ニ付仰渡留」第303号について	220
麻生伸一「御上国一往被遊御猶豫候日記」第311号について	247
麻生伸一「御国元御内用」第353・354・355号について	259
西里喜行「明治初期在日琉球使節の任務と動向Ⅰ」第706・707・708号について	280
西里喜行「明治初期在日琉球使節の任務と動向Ⅱ」第701・702・703・704号について	375
赤嶺守「條款官話」第170号について	450
青木一桂「唐冠服図帳」第504号について	466
安里進「量地法式集」第505号について	473
第Ⅲ部「尚家文書目録（撮影複製）篇」	511

## はじめに－研究の背景と目的－

豊見山 和行

本研究計画を立案した背景と研究の目的について、「尚家文書」と筆者の若干の関わりを交えて略記しておきたい。「尚家文書」とは、一般的に旧尚王家が所蔵していた琉球の古文書群のことを指す。その伝来を概観すると次のようになる。

1879年(明治12)の「琉球処分」によって琉球国が解体された際、首里城に格護されていた文書群は分割されて明治政府、尚家、沖縄県庁そして沖縄県立図書館へと、それぞれ変転を経て移管された。外交関係を主体とした一連の文書群(首里王府評定所文書)は明治政府によって接收され、外務省(後に内務省)へ移管されたが、1923年(大正12)の関東大震災で大半が消失した。しかし、幸いなことに、その原本や写本の一部が東京大学法学部法制資料室および同大史料編纂所、そして警察庁(後に国立公文書館へ移管)に分散・保存されていたことが判明した。そのことを契機に、浦添市教育委員会によって全19巻の『琉球王国評定所文書』(1988年－2002年)として翻刻・刊行が実現した。

他方、明治政府の接收から除外され、尚家に移管された文書群は、首里の世子邸である中城御殿に保存されていた。琉球国最後の国王であった尚泰の一代記編纂の必要上、尚泰に関連する一連の文書群が東京の尚家邸へと移送され、東恩納寛惇の手によって『尚泰侯実録』として1924年に刊行された。沖縄に残されていた大半の「尚家文書」を始めとして、沖縄県庁・沖縄県立図書館等に保管されていた古文書群は、1945年の沖縄戦によって灰燼に帰した。東京へ移送され、関東大震災や第二次世界大戦の戦禍をくぐり抜けてきた文書群が、現在知られる「尚家文書」として伝存することとなったのである。

しかし、「尚家文書」は戦前戦後を通じて、長く公開されることのない文書群であった。そのため『尚泰侯実録』と同書の基礎史料となった「史料稿本(尚泰関係史料)」(東恩納による抜粋・筆写史料集、『那覇市史』資料篇第2巻中4所収、1971年)を例外として、歴史研究の対象史料として研究者が活用することは不可能であった。多くの研究者同様、筆者も『御蔵本目録』(1932年)や『古文書等緊急調査報告書』(1973年)等の文書目録の表題からその中身を推測する以外に術はなかった。時おり墓標を眺めるように、それらの目録類に目を通しながら、「尚家文書」を目にすることはおろか手に取って読解することなど生涯ありえないものと諦めていた。また、1988年には、東京都台東区への尚家文物の寄贈問題が一時持ち上がり、沖縄では社会的問題となるなど、「尚家文書」の行く末はますます混沌として不透明なものに思えた。

そのような折り、ひとつの転機が訪れた。「日本復帰20周年記念」行事の一環として、1993年1月5日から同2月14日に「尚家継承琉球王朝文化遺産展」が沖縄県立博物館で開催されたのである。国王装束をはじめ金工、染織品等とともに「尚家文書」(53点)も展示された。戦前戦後を通じて初めての尚家文物の「里帰り」展示会は大盛況となった。その図録の解説担当者(古文書・典籍部分)として、池宮正治、田名真之、真栄平房昭の各氏とともに筆者も参加する機会を与えられた(『尚家継承琉球王朝文化遺産展』図録、琉球新報社、1993年)。前年の11月4、5日のわずか2日間ではあったが、東京国立博物館において初めて「尚家文書」の実物と対面した。真栄平氏ともども昼食の休憩時

間も惜しみ、一心に展示史料の選定と解説文作成に取りかかった。再び「尚家文書」を閲覧できる保障などどこにもなかったからだ。幸いにも、そのことは杞憂に終わった。展示会の2年後の1995年9月に、東京尚家の継承する古文書1,300点余を皮切りに以後、尚家継承の文物は那覇市へ寄贈されたからである。

その後、那覇市は1998年度から2002年度の5年間にわたって、文化庁国庫補助事業として「尚家関係資料総合調査」を実施した。古文書部会と美術工芸部会の2つの委員会が設けられ、古文書部会は池宮正治、糸数兼治、小川武、金城功、高良倉吉の各氏および筆者の6名から構成され、その成果は『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ 古文書編』（那覇市市民文化部歴史資料室編、2003年）として刊行された。ちなみに、那覇市へ寄贈された尚家継承の美術工芸品や古文書は、2006年に「琉球国王尚家関係資料」として一括して国宝に指定された。

国宝指定以前に、本科研の研究計画を立案したのは、次の点にあった。古文書（「尚家文書」）の活用において、原本の閲覧こそ最善であるが、虫損や破損などで状態の悪化した原本を頻繁に閲覧することは、原本のより一層の劣化に繋がるため可能な限り避けなければならない。大量の古文書の保存と公開・利用というあい矛盾する状況を克服するために現時点における最良の方法は、マイクロフィルムによる撮影であろう。撮影済みのマイクロフィルムは、マイクロリーダーか複製（紙焼き、デジタル化）等々で活用が可能となり、原本を保存しつつ閲覧が可能となるからである。

那覇市では、「尚家文書」公開へ向けての作業が取り組まれたものの予算面での制約から、国文学研究資料館の協力によって「尚家文書」のマイクロフィルム撮影が一部分実施されていた。しかしながら、その作業は部分的であること、マイクロフィルムの提供に止まることなどから、早急に「尚家文書」全体の撮影とフィルムからの複製（紙焼き）作業の取り組みが喫緊の課題として残されていた。

これらのことを念頭に本研究計画を立案し、那覇市歴史資料室（現那覇市歴史博物館）に打診・協議したところ、幸いにも了解が得られ、本科研は2004年度から開始することができた。「尚家文書」の現時点における課題は、前述のように全文書のマイクロフィルム撮影と複製（紙焼き）によって研究の基盤整備を図ることにあることから、本科研の最大の目的はその点に置かれた。しかしながら、原本の状態は区々であった。撮影に耐え得ないほど劣化した文書の撮影は断念せざるをえなかったが、全体の9割程度の撮影とその複製（紙焼き）は実現した。本報告書巻末の目録が、それに当たる。

「尚家文書」は国宝指定を受けたものの、その公開・活用が制約された状況にあるため、その価値を十分に発揮することはできない。国宝か否かに関わらず、古文書は公開・活用されて始めてその価値が高まるのであり、本科研がいささかなりともその基盤整備に寄与しえたならば、望外の幸いである。

末筆ながら本科研について、那覇市歴史博物館スタッフや関係者からの理解と多大な協力を得られたことに対して、また小研究会での発表を寄稿して頂いた研究分担者と研究協力者の各位に対して、心より感謝の念を表したい。とりわけ研究協力者の麻生伸一氏には、巻末の目録作成やデータ整理などにおいても尽力して頂いた。記して謝意を表したい。

## 研究課題：琉球国王家・尚家文書の総合的研究

### 研究組織：

- 研究代表者 豊見山和行（琉球大学教育学部教授）  
研究分担者 赤嶺守（琉球大学法文学部教授）  
研究分担者 高良倉吉（琉球大学法文学部教授）  
研究分担者 山里純一（琉球大学法文学部教授）  
研究分担者 上原兼善（岡山大学教育学部教授）  
研究分担者 真栄平房昭（神戸女学院大学文学部教授）  
研究分担者 田名真之（沖縄国際大学総合文化学部教授：2005年度より参加）  
研究分担者 安里進（沖縄県立芸術大学音楽学部教授：2007年度より参加）  
研究分担者 池宮正治（前琉球大学法文学部教授：2006年度より研究協力者）  
研究分担者 西里喜行（前琉球大学教育学部教授：2006年度より研究協力者）
- 研究協力者 外間政明（那覇市歴史博物館学芸員）  
研究協力者 深澤秋人（沖縄国際大学等講師）  
研究協力者 麻生伸一（琉球大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）  
研究協力者 前田舟子（琉球大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）  
研究協力者 青木一圭（琉球大学大学院教育学研究科修士課程）  
研究協力者 石原清香（琉球大学大学院教育学研究科修士課程）

研究経費	〈直接経費〉	〈間接経費〉	〈合計〉
2004(平成16)年度	6,200千円	0円	6,200千円
2005(平成17)年度	3,900千円	0円	3,900千円
2006(平成18)年度	3,000千円	0円	3,000千円
2007(平成19)年度	1,900千円	570千円	2,470千円
総計	15,000千円	570千円	15,570千円

### 研究成果

#### (1) 学会誌等

- 赤嶺守「琉球王国の崛起與滅亡」『歴史月刊』第27期12号、2006年、31－51ページ。  
赤嶺守「琉球帰属問題交渉与脱清人」『第九届中琉歴史関係国際学術会議論文集』海洋出版社、2005年、330－348ページ。  
上原兼善「大名茶の形成と島津氏」『日本史研究』第518号、2005年、24－51ページ。  
高良倉吉「伊是名玉御殿の被葬者についての検討」『首里城研究』第9号、2006年、59－70ページ。  
高良倉吉「『古琉球』『中世』そして『近世』をめぐる琉球史の諸相」『中世文学』第51号、2006年、12－15ページ。

- 高良倉吉「近世末近代初頭の琉球における模合請取証文について」『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集』第12号、2006年、169 - 186ページ。
- 高良倉吉「琉球史研究をめぐる40年」『沖縄文化』100号、2006年、45 - 59ページ。
- 田名真之「都市問題への対処(蔡温と国土経営④)」『しまたてい』第39号、2006年、6 - 9ページ。
- 豊見山和行「琉球史における自然と開発—琉球列島生活環境史の試み—」『研究彙報「資源の分配と共有に関する人類学的総合領域の構築」自然資源の認知と加工研究班報告』第9号、2005年、3 - 7ページ。
- 豊見山和行「琉球列島の海域史研究序説—研究史の回顧と二、三の問題を中心に—」『琉球大学教育学部紀要』68集、2006年、253 - 264ページ。
- 豊見山和行「冊封使・徐葆光の記録『中山伝信録』と琉球」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、第71巻10号、2006年、153 - 159ページ。
- 豊見山和行「近世琉球史への視点—薩摩藩による琉球支配の再検討—」『歴史地理教育』第714号、68 - 73ページ。
- 真栄平房昭「16～17世紀における琉球海域と幕藩制支配」『日本史研究』第500号、2004年、50 - 75ページ。
- 真栄平房昭「清代中国における海賊問題と琉球—東アジア海域史研究の一視点—」『東洋史研究』第63巻第3号、2004年、36 - 70ページ。
- 真栄平房昭「明末 中国人の琉球渡航記」『海路』第2号、2005年、171 - 177ページ。
- 真栄平房昭「琉球王国に伝来した中国絵画」『沖縄文化』100号、2006年、60 - 88ページ。
- 西里喜行「中琉交渉史における福州琉球館の諸相」『琉球大学教育学部紀要』第68集、2006年、309 - 321ページ。
- 山里純一「琉球の靈籤について」『日本東洋文化論集』第12号、2006年、187 - 213ページ。
- 山里純一「日本古代国家と奄美・多瀬・掖玖」『東アジアの古代文化』第130号、2007年、144 - 152ページ。

## (2) 口頭発表等

- 田名真之「琉球王権の系譜認識と源為朝渡来伝承」、九州史学研究会『九州史学』創刊50周年記念大会、於博多、2006年10月。
- 真栄平房昭「清国を訪れた琉球使節の見聞録—『琉客談記』を中心に—」、第8回琉球・中国交流史に関するシンポジウム、於北京、2006年11月。
- 西里喜行「明清交替期の中琉日関係に関する一考察—尚賢・尚質・尚貞の冊封問題とその周辺—」、第8回琉球・中国交流史に関するシンポジウム、於北京、2006年11月。
- 豊見山和行「近世琉球王国の「自立」—冊封・朝貢と領分のあいだ—」、第105回史学会大会、於東京、2007年11月。
- 豊見山和行「『首里・那覇港図屏風』から見た近世の琉球社会—港町・交易・紛争—」、沖縄県立博物館文化講座、於那覇、2008年3月。

### (3) 出版物

- 赤嶺守『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』講談社、2004年、228ページ。
- 安里進、高良倉吉、田名真之、豊見山和行、真栄平房昭、西里喜行『沖縄県の歴史』山川出版社、2004年、371ページ。
- 安里進「琉球王国形成の新展望」『中世の系譜東と西、北と南の世界』高志書院、2004年、215 - 242ページ。
- 安里進『琉球の王権とグスク』山川出版社、2006年、100ページ。
- 安里進「考古学から『おもろさうし』を読む」『琉球の歴史と文化－『おもろさうし』の世界－』角川書店、2007年、75 - 96ページ。
- 上原兼善「島津氏の琉球征服の意義とその後の中国・日本との関係」『沖縄県史各論編4近世』第1部第2章、沖縄県教育委員会、2005年、61 - 99ページ。
- 上原兼善「中国に対する琉日関係の隠蔽政策と「道之島」」『近世地域史フォーラム①列島史の南と北』吉川弘文館、2006年、35 - 56ページ。
- 高良倉吉「首里城正殿の重修にみる王府プロジェクト」『沖縄県史各論編4近世』第5部第1章、沖縄県教育委員会、2005年、449 - 464ページ。
- 高良倉吉「大交易時代とオモロそしてヒキ」『琉球の歴史と文化－『おもろさうし』の世界－』角川書店、2007年、97 - 114ページ。
- 田名真之「近世の官僚制－人事を中心に－」『沖縄県史各論編4近世』第2部第1章、沖縄県教育委員会、2005年、123 - 136ページ。
- 豊見山和行『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館、2004年、309ページ。
- 豊見山和行・高良倉吉編『街道の日本史56琉球・沖縄と海上の道』吉川弘文館、2005年、279ページ。
- 豊見山和行「「近世琉球」という時代」『沖縄県史各論編4近世』総論、沖縄県教育委員会、2005年、3 - 26ページ。
- 豊見山和行「漁撈・海運・商活動－海面利用をめぐる海人と陸人の琉球史－」『地域の自立シマの力(下)』コモンズ、2006年、173 - 197ページ。
- 豊見山和行「琉球国における海運と航海守護神信仰－『おもろさうし』を読むための一前提－」『琉球の歴史と文化－『おもろさうし』の世界－』角川書店、2007年、116 - 132ページ。
- 真栄平房昭「16～17世紀における琉球海域と幕藩制支配」『沖縄県史各論編4近世』第1部第1章、沖縄県教育委員会、2005年、31 - 58ページ。
- 真栄平房昭「近世日本の境界領域－琉球の視点を中心として－」『近世地域史フォーラム①列島史の南と北』吉川弘文館、2006年、3 - 34ページ。
- 西里喜行『清末中琉日関係史の研究』京都大学学術出版会、2005年、848ページ。
- 西里喜行「近世末期の内政問題と対外関係」『沖縄県史各論編4近世』第6部、沖縄県教育委員会、2005年、613 - 657ページ。
- 山里純一『呪符の文化史』三弥井書店、2004年、350ページ。
- 山里純一「呪符の機能」『文字と古代日本4 神仏と文字』吉川弘文館、2005年53 - 77ページ。
- 山里純一「魔除け信仰」『石垣市史各論編 民俗下』石垣市、2007年、145 - 178ページ。



# 本報告書の構成と「尚家文書」研究の現状

豊見山 和行

## 1. 本報告書の全体構成

本報告書が、科研成果報告書としてはやや大部なものとなった理由は次の点による。本報告書の構成は、第Ⅰ部「論考篇」、第Ⅱ部「史料解説・紹介篇」、そして第Ⅲ部「尚家文書目録（撮影複製）篇」からなる。

第Ⅰ部「論考篇」は、「尚家文書」をめぐる諸問題についての論考をとりまとめたものである。直接的に「尚家文書」を使用することで、新たな史実を明らかにした詳細な論考や戦前における「尚家文書」の調査状況に関する論考、あるいは特定のテーマについて史料紹介をかねた論考などから編成されている。テーマや論述形式も自由に設定し執筆してもらった諸論考である。

第Ⅱ部「史料解説・紹介篇」は、史料の翻刻およびその紹介を主体として編成した。現時点において「尚家文書」は、史料の保存・整理作業等々の諸般の事情から非公開の状況に置かれている。そのため本報告書においては、特に史料の翻刻・解説を重視し、不十分ではあるが可能なかぎり多様な文書の原文（翻刻）を盛り込むことによって、本科研に直接参加できなかった研究者にも活用の途を開くことを企図した。

歴史学、特に文献史学においては、各研究者が原史料（原文）を直接、分析・検証することを通してはじめて史実が確定され、あらたな歴史像がうち立てられる。データを共有することは他の学問分野においてもひとしく重要であるが、史料の共有ないし史料へのアクセスを自由に行える研究環境はとりわけ歴史研究においては必須であり、そのことによって歴史研究の前進が図られると言えよう。

そのような意図のもとに第Ⅱ部を編成したが、編者の要望を越えた翻刻史料が寄せられ、嬉しい悲鳴をあげる結果となった。紹介および翻刻済みの諸文書は、もとより現存する「尚家文書」の九牛の一毛にすぎない。しかし、それらは今後の「尚家文書」研究において、重要な足がかりになるものと確信している。

第Ⅲ部「尚家文書目録（撮影複製）篇」では、本科研によるマイクロフィルム撮影（既存分を含む）とそれらからの複製（紙焼き）分の目録を掲載した。本目録は「尚家継承古文書目録」（『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ 古文書編』那覇市市民文化部歴史資料室編、2003年）を下敷きとして、項目を一部新たに加えた。「撮影製本」を新規項目として表の左端に挿入し、マイクロフィルム撮影および複製（紙焼き）済みの文書には黒丸印をつけた。そのことで、撮影・紙焼きの現状が一目で判別できるようにした。

本科研では、目録の文書番号1号から第1276号までを撮影対象としたが、文書の状態が悪いものは撮影の対象外とした。また那覇市歴史博物館との協議によって、第1154号から1193号文書は大正期（1920年代）にかかることなどを理由に除外した。ただし、第1190号、第1191号は葬送関係の参考文書として撮影した。

なお、マイクロフィルム・紙焼き分は、那覇市歴史博物館と本科研代表者でそれぞれ一部ずつ所持している。

## 2. 「尚家文書」研究の現状

「尚家文書」は長く非公開の文書群であったことから、その本格的な研究は不可能であった。本科研によってその端緒がようやく開かれた、というのが研究の現状である。ここでは今後の本格的な研究への橋渡しを意識して、本報告書の成果を除き、現時点における研究状況を略述しておきたい。

旧来の「尚家文書」へのアプローチには、二つの方法が見られる。第一は目録類からのアプローチであり、第二は原文書の紹介を目的としたアプローチである。第一の目録類からアプローチした主な論考には、次のものがある。

- a: 外間守善「まえがき—尚侯爵家『御蔵本目録』について—」(法政大学沖縄文化研究所編『御蔵本目録(尚侯爵家)』1983年)。
- b: 真栄平房昭「琉球外交史料の伝存状況について—『尚家文書』・『内閣文庫』の冊封関係史料を中心に—」(『新しい歴史学のために』第230・第231合併号、1998年)。
- c: 堀口修「尚侯爵家東京邸所蔵史(資)料に関する基礎的研究」(『古文書研究』第56号、2002年)。
- d: 外間政明「尚家継承古文書の既存目録と評定所文書」(前掲『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ』2003年)。

これらの文書目録類からのアプローチによって得られる利点は、文書群の全体的変遷とかつてどのような文書が存在していたのか、そしてそれがどのようにして伝来したかを明らかにする上で基礎的な情報を提供してくれる点にある。これらの目録類から得られた知見と現存する「尚家文書目録」(第Ⅲ部参照)との突き合わせによって、何が失われたのかを明らかにすることが可能となる。また、断片的に残された文書の一部と「尚家文書」との関連性を検討することも可能となる。

ちなみに、前掲『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ』所収の「尚家継承古文書目録」と国宝指定を受けて作成された「琉球国王尚家関係資料目録Ⅱ文書・記録類」(『国宝「琉球国王尚家関係資料」のすべて』沖縄タイムス社、2006年)では、若干の違いが見られる。後者の目録では、第1号から第1276号文書の内、第1154号から第1195号は国宝指定から除外されているため、その分の記載は削除されている。

次に第二の原文書の内容の紹介を目的としたアプローチには、以下の二つがある。

- e: 「尚家文書類目録」解説(『古文書等緊急調査報告書』沖縄県教育委員会、1973年)。
- f: 「尚家継承古文書分類解説」(『尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ 古文書編』那覇市市民文化部歴史資料室編、2003年)。

e解説の特徴は、14の項目に分類することで尚家文書全体を捉えることが可能となった点にある。しかし、各項目の解説は、紙幅の関係上か、あるいは短期間の調査日程によるものか、概してあまりにも短文なため文書内容を把握するには隔靴搔痒の観が否めない。また14の分類名には、適切とはいえないものも含まれているように思われる。参考まで

にそれらの分類名を記すと次のようになる。

(1) 典籍、(2) 日記関係、(3) 日琉往復関係記録、(4) 日琉外交関係、(5) 上下状、(6) 法制関係、(7) 冠船関係、(8) 接貢船、(9) 中琉外交関係、(10) 異国船来航関係、(11) 王庁政務関係、(12) 財政関係、(13) 雑記録、(14) 文書。

上記の(2) 日記関係という分類では、(2) 以外の他の項目にも多様な日記類が存在することから、その括り方の意味あいが判然としない。また(3)(4) の日琉往復、日琉外交の差異も不明であり、それらと(5) の上下状は内容上、重複するものも見られる。(13)(14) の分類名も意味が取りにくいものとなっている。とりわけ(8) の接貢船という分類名は、全く不可解としか言いようがない。その内容は進貢船・接貢船の仕出日記や帰帆日記など対清朝貢関係に関わる文書群であり、それらを包括する分類名が接貢船では誤解を招く要因になるものと思われる。

次に f 「尚家継承古文書分類解説」は、以下の分類に従ったものとなっている。

(1) 尚王家関係、(2) 冠船関係、(3) 進貢船・接貢船関係、(4) 琉球・薩摩関係、(5) 政務・財政関係、(6) 異国船関係、(7) 琉球処分関係、(8) 琉球処分関係（一紙文書）、(9) 東京関係、(10) 典籍・版本・刊本。

これらの分類項目の特徴は、各文書の内容に即して再編・整理されたものとなっている。特に、琉球処分に関係する文書群を(7)(8)(9)として区分し、旧来の目録類とは大きく異なっている。これらの分類は現時点では最良のものと言えるが、今後研究の進展にともない若干の見直しが必要となることも予想される。

ともあれ、これらの分類に従って f の「解説」は、(1)(2) を池宮正治、(3) を高良倉吉、(4)(5) を豊見山和行、(6) を糸数兼治、(7)(8)(9) を高良倉吉、(10) を糸数兼治によって行われている。e 「尚家文書類目録」解説に較べると、分類項目ごとの解説の紙幅は増えており、格段に踏み込んだ解説となっている。しかしながら、各項目の全体的解説という点に力点があるため、個々の文書解説という点ではなお不十分だと言えよう。

以上、「尚家文書」をめぐる目録状況および研究状況について一瞥した。「尚家文書」をめぐる研究状況を一步でも前進する役割を本科研が担えたならば、本科研の当初計画は達成されたと言えよう。

なお、凡例的に示すと、/ の記号は改行を示す。合体字（「より」など）は通常の平仮名とした。而（て）、茂（も）、江（え）、与（と）、者（は）などの変体仮名は、そのまま漢字を使用した。紙幅の関係上、必ずしも原文書通りの書式（台頭、平出、闕字など）になっていないものもある。外字は使用せず、【口愛】（あつかい）等として【 】や\*○+○\*で処理した。